


つなぐれ和泉っ子

令和3年9月1日

～人と社会と未来の自分～

和泉

9 月号

<https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/izu>

「言葉」

校長 中澤 道則

今年も新型コロナウイルス感染症拡大で発出された緊急事態宣言の中での夏休みでした。私自身も多くの時間を家で過ごしました。こんな“STAY HOME”の中、私は家で過ごす多くの時間の、そのまた多くの時間をオリンピックのテレビ中継を見て過ごしていました。もちろん、新型コロナウイルス感染症拡大の中でのオリンピック開催については賛否分かれるところではありますがそれでもオリンピックで躍動する選手の姿には国籍を問わず心を動かされました。

そんな中でスケートボードの解説が話題になっています。「ビッタビタ」、「ゴン攻め」、「鬼やば」等々、ふだん「解説者の言葉」としてはあまり聞かない表現が次々と出てくる解説。そんな「若者言葉」を駆使した解説はSNS上では「聞いていて楽しかった」「分かりやすかった」という「好」評価がある反面、「不快に感じた」という記事も見受けられます。

「言葉」というものは「固まった」ものではありません。「時代」の中で生き、成長していくものなのだと思います。例えば「早急」という言葉。これは本来「さっきゅう」と読むのですが、今は「そうきゅう」という読み方も認められてきています。「重複（ちょうふく・じゅうふく）」「固執（こしゅう・こしつ）」等もそうです。特に「固執」の場合、今では旧来の「こしゅう」よりも「こしつ」という読みの方が普通に使われているようです。一時、話題となった「ら抜き言葉」などもそうです。「時代」と共にあり、生まれたり消えて行ったりする言葉は、時の流れの中で淘汰されていくものです。今回のスケートボードの解説に使われた「言葉」が「日本語」として根付いていくか否かはまさにこれからの「時の流れ」の中で決められていくのでしょう。

「言葉」は「言の葉」。紀貫之は古今和歌集仮名序の中に「やまとうたは、人の心を種として、万のことの葉とぞなれりける」と書いています。心を「種」とし、言葉を「葉」としているのです。「言の葉」は「心」が形となって表れたものだという意味です。これすなわちその時代の「価値観」によって「言葉」も変わってくと云うことなのだと思います。それでも「言葉」が人と人をつなぐこともその関係を断つこともできるものであることは時が流れても変わらないでしょう。私たちは日々、何千語という言葉をつ紡ぎだしています。その言葉が「人と人とのよりよい関係を生み出すことのできるもの」であるよう、日々、心がけていきたいものです。

9月になりました。過日お知らせしたように、横浜市の公立学校は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため分散登校での再開となりました。保護者の皆様にはご苦勞をおかけいたします。また、引き続き感染拡大防止対策にご協力いただきますよう、お願いいたします。学校でも感染拡大防止対策・熱中症予防対策に努めつつ、「よりよい言語環境」の中での子ども達の学びを充実させるべく、教職員一同、力を尽くしてまいります。保護者、地域の皆様におかれましても引き続き宜しくご理解、ご協力を賜りたくお願いいたします。